

HBS研究部だより



Vol. 14

巻頭言

目次

就任のご挨拶	p.1
研究部長 玉置 俊晃	
研究部長退任にあたって	p.2
前研究部長 林 良夫	
特集	p.3
●生命科学総合実験研究棟の完成	
医療情報学分野 森口 博基	
●総合研究支援センターニュース	p.6
●医療教育開発センターニュース	p.7
公開シンポジウム開催報告	p.8
女性の健康支援看護学分野 岸田 佐智	
市民公開講座開催報告	p.8
衛生薬学分野 徳村 彰	
ソウル大学-徳島大学学術交流協定 20周年記念シンポジウム報告	p.9
機能分子合成薬学分野 大高 章	
●研究部ホットニュース	p.10
徳島大学AWAサポートセンター長 本仲 純子 口腔顎顔面形態学分野 北村 清一郎	
●旬の研究紹介	p.12
若手研究発表会開催報告	p.12
国際シンポジウム開催報告	p.13
分子医学分野 野間 隆文	
国際交流の夕べ開催報告	p.13
医学部長補佐 村澤 普恵	
新任教授ご挨拶	p.14
退職教授一覧	p.15
学会情報	p.15
学会賞等受賞者紹介	p.16
編集後記	p.16



研究部長就任のご挨拶

—HBS研究部長(医科学教育部長) 玉置 俊晃

平成23年4月1日付けで徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス(HBS)研究部の研究部長を拝命しました。平成16年4月にHBS研究部創設以来、曾根三郎初代研究部長・林良夫2代目研究部長のもとで統合医療教育開発センター長(現:医療教育開発センター)、副研究部長を勤めてまいりHBS研究部の運営にも継続的に関与してきました。この間に、共通講義、共通授業評価、小豆島リトリート、SP養成、Inter Professional Education などの実施にHBS研究部の一員として皆様と努力してきたつもりです。今後、HBS研究部長としてHBS研究部をどの様に運営していくのか、今の私の思いをご挨拶として述べさせていただきます。

HBS研究部創設以来7年間が経過しましたが、国立大学の法人化、政権与党の交代、日本経済の失速などの影響を受けて徳島大学を取り巻く研究環境も大きく変化したように思います。研究環境だけでなく、人の気持ちも変わったのでしょうか?特に、学生や若手研究者の気持ちが変わっていないのか?と、非常に心配しています。日本経済の長期低迷と地球温暖化の抑制にむけたエコ活動が重なったためか、エネルギーに満ちあふれて大きな夢を抱いて欲しい若者までが、省エネルギーで内向きの姿勢を示す場面に出くわすことがあり寂しく残念に思うことが時々あります。学生や若手研究者は、大志を抱き驚くような大きな夢を語ってもらいたい。今こそ、徳島大学の学生や若手研究者が途方もない大きな夢と希望を持てるような研究環境を作り上げることが、HBS研究部の運営に求められていると考えています。また、この度、HBS研究部長に指名された私がHBS研究部の運営で最も力を入れたい事業は、蔵本地区の徳島大学の学生や若手研究者の心と頭を元気澁刺にする事業です。

四国の地では、徳島大学は医学部を中心に生命科学の研究活動を最も古くから開始しており、現在は医学部医学科・栄養学科・保健学科、歯学部歯学科・口腔保健学科、薬学部薬学科・創製薬科学科と疾患酵素学研究センター、疾患ゲノム研究センター、徳島大学病院を有する四国最大の生命科学の研究拠点であります。この四国一の生命科学の研究拠点をさらに一層活性化するために、5つの大学院教育部が連携・協力して学部学科の垣根を取り去り5つの大学院教育部の教員が全てHBS研究部に集結して、世界の研究拠点形成を目指していると認識しています。日本の地方大学として人的にも財政的にも制限がある徳島大学が、世界から注目され個性が輝く研究拠点形成を目指すためには、徳島大学出身の若手研究者が世界最高水準の研究者に成長していくことが不可欠であると信じています。既に医学部では Student Lab を設置して、モチベーションが高い学部学生が入学直後から生命科学の研究に参加できる環境と体制を整備しました。M.D.,Ph.D.コースへ進学する学生が増加することを目指して、また、学部学生の research mind や医療人としての professionalism を刺激するために、海外の大学に医学生を派遣する事業を始めました。このような学生や若手研究者を刺激するための海外の大学や研究機関との双方向の交流をHBS研究部でも推進したいと考えています。さらに、人材育成に関する競争的資金の獲得に努力して、意欲の高い学生に対しては出来る限りの経済支援も行いたいと考えています。世界のトップランナーを目指す学生や若手研究者を増加させることが、徳島大学蔵本地区が世界の研究拠点になるための最も良い方策であると信じています。10~20年先を見据えて、HBS研究部で計画的に世界的な研究・教育拠点を戦略的に形成していきたいと考えていますので、皆様の御協力をお願い申し上げます。

研究部長退任にあたって

前 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部長 林 良夫

平成20年4月に曾根三郎初代研究部長のあとを受けて研究部長職を拝命し、このたび定年退職を迎えて退任することになりました。平成16年度に統合された大学院ヘルスバイオサイエンス（HBS）研究部は発足後7年を経過し、疾患酵素学研究センター、疾患ゲノム研究センター、大学病院との連携・協力のもとに世界的ライフサイエンス研究拠点の基盤構築を目指して日夜努力を重ねてきました。医療系の5つの系が研究マインドを共有し、連帯と連携を軸に発展してこれたのも構成員をはじめ、多くの方々のご尽力並びにご協力の賜と感謝しております。HBS研究部を構成する各系はそれぞれ専門性や人材の育成法に違いがあるものの、質の高い医療の創生、高度医療人の育成、若手研究者・女性研究者の育成などを共通のキーワードとして組織的に取り組んで参りました。研究面でグローバルな競争に勝ち抜くためには国際競争力を高める必要があります、次世代の担い手たる若手研究者、大学院生の質を世界レベルに近づけるべく人材育成改革が求められています。平成21年度に採択された大学院GP『医療系クラスターによる組織的大学院教育』事業において、医療教育開発センターの機能強化を軸として、専門分野の異なる複数の医療系大学院教員からなる「教育クラスター」を形成して大学院生の指導体制の強化と充実を図ることが計画され、実施されています。領域横断的・学際的研究を自立的・実質的に遂行することができる医療系研究者の育成を目的として、研究テーマの設定から単位取得、学位取得まで大学院生の主体性を尊重したきめ細かい指導を行う中での大学院教育の国際化・実質化が喫緊の課題です。

先端的な生命科学研究の展開には、その支援体制の構築が最も重要です。平成21年には動物資源研究部門（動物実験施設）、先端医療研究部門（先端医研）をHBS総合研究支援センターとして再構築し、より効率的な研究支援体制の強化を図りました。また、教育研究環境の整備のためには、施設整備が不可欠ですが、蔵本地区での施設整備はこの間大きく進展しました。学長をリーダーとする本部役員会の絶大なご尽力のもと大型整備予算が獲得され、アイソトープ総合センター、動物実験施設、生命科学総合実験研究棟の改修などが次々に実施され、疾患生命科学の一大拠点としての施設がほぼ整備されました。さらに、平成21年度補正予算等で多数のイメージング関連大型機器が導入され、日本最大級のバイオイメージングステーション施設が蔵本キャンパスに設置されました。研究用PET/CT、MRI及びin vivoイメージング装置、多光子共焦点レーザー顕微鏡などの大型機器が整備され、個体レベルから分子レベルまでの解析が可能なイメージング機器をひとつの敷地内に有する大学は全国唯一であるといえます。これらの最先端施設を最大限に有効に生かし我国における疾患生命科学研究の雄としての立場を確立していく絶好の好機を迎えています。また、連携大学院として平成22年に宇宙航空研究開発機構（JAXA）との協定を、平成24年には神戸理研との協定が予定されています。これら学内外、国内外の関係組織と有機的かつ実質的な共同研究や連携活動を積極的に推進し、世界レベルの質の高い先端生命科学研究に集中的に力を注いで行く体制が整いました。

最後になりましたが、関係各位からのこれまでのご指導、ご支援に対して深く感謝申し上げますとともに、HBS研究部が我国を代表する世界的生命科学研究の一大拠点としてさらに高いステージを目指して継続的に発展されることを心から祈念しております。



平成23年2月15日歯学部大講義室において、最終講義が行われました。250人を越える学生・教職員が拝聴しました。林先生有難うございました。そしてお疲れ様でした。



徳島大学生命科学総合実験研究棟(医学臨床B棟)の完成

医療情報学分野 森口 博基

3月1日(火)、午前10時30分から、工事関係者・大学関係者ら約60名の出席のもと、第一会議室において徳島大学生命科学総合実験研究棟、動物実験施設及び保健学系総合実験研究棟(B棟)改修工事完成記念式典が開催されました。工事関係者に感謝状が贈られた後、改修工事を終えた建物の見学会が行われました。

蔵本キャンパスには、医学部、歯学部、薬学部、疾患酵素学研究センター、疾患ゲノム研究センター、さらには徳島大学病院という生命科学の基礎から臨床、遺伝子解析、創薬を網羅する研究部門が集積し、それぞれの部門で優れた成果を上げています。このたびの改修工事により、これらの研究拠点が総合的に連携できる環境が整ったといえます。加えて1階に計画されている日本最大規模のバイオイメージングステーションが開設されると、疾患生命科学の飛躍的な進展が期待されます。

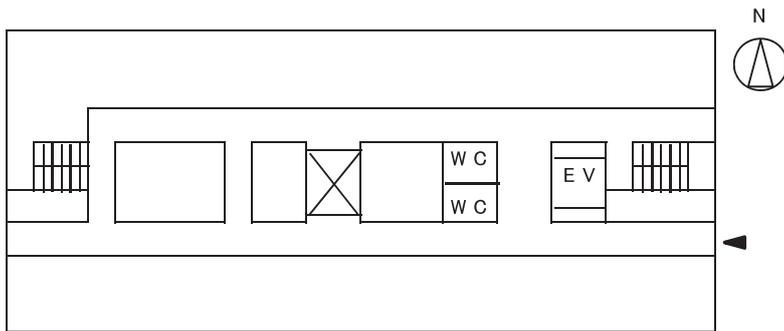
今回は、同じ蔵本キャンパス内から移転してきた歯学系および薬学系の分野をご紹介します。

8 F	眼科学	腫瘍内科学	呼吸器・膠原病内科学
7 F	腎臓内科学		小児医学
6 F	脳神経外科学		消化器・移植外科学
5 F	医薬品情報学	医薬品病態生化学	臨床薬剤学 医薬品機能生化学
4 F	口腔外科学	口腔内科学	循環器内科学
3 F	歯科麻酔科学		麻酔・疼痛治療医学
2 F	歯科放射線学	医療情報学	放射線科学
1 F	総合研究支援センターバイオイメージング研究部門		設備室

- : 医学系臨床分野
- : 薬学系臨床分野
- : 歯学系臨床分野

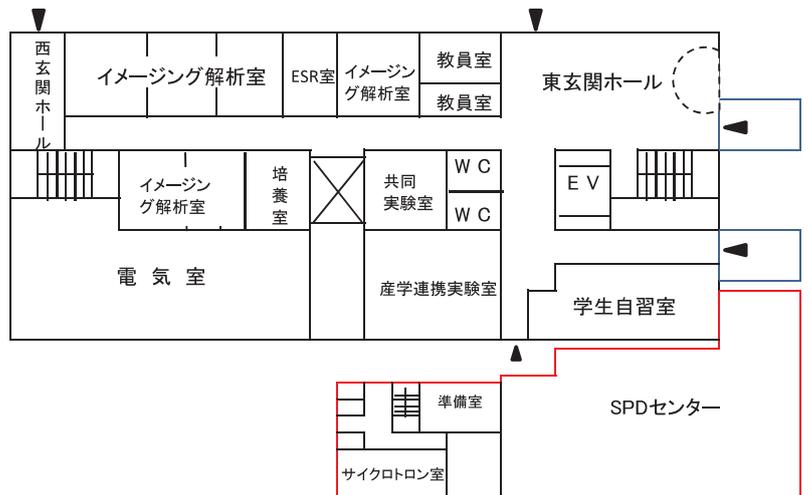
※各階の配置を示すものであり、占有面積とは一致しません
 ※各階に共有スペースがあります

医学臨床B棟各階位置図



医学臨床B棟平面図 (2F~8F)

医学臨床B棟平面図 (1F)



歯学系4分野の生命科学総合実験研究棟への移転

歯科麻酔科学分野 北 畑 洋

平成22年10月31日から約一ヶ月間かけて、旧第3病棟跡地に竣工したヘルスバイオサイエンス（HBS）研究部生命科学総合実験研究棟に医歯薬の各研究分野が移転を完了した。口腔科学教育部の臨床系分野では、歯科口腔外科学、口腔内科学、歯科麻酔科学、歯科放射線学の4分野が歯科棟から生命科学棟へ移転を行った。4階には口腔外科学と口腔内科学の医局と実験室が隣接し、歯科麻酔科学と医科学教育部の麻酔・疼痛治療医学が全学共用スペースを挟んで3階の同じフロアに、2階には歯科放射線学と医科放射線科学が並ぶように配置されている。平成16年に医科学、口腔科学、栄養生命科学、薬科学の蔵本地区における医療系大学院研究科が統合されてHBS研究部が発足し、統合大学院として分野の垣根を越えて共同研究が推進されてきた。今回、完成した生命科学総合実験研究棟は、医歯薬の各分野が集結して関連分野が1ユニットに編成され、1階にはHBS総合研究支援センターバイオイメージング研究部門が設置されるなど、まさしくHBS研究部設立の理念のシンボルと言える。今後は徳島大学病院、疾患ゲノム研究センター、疾患酵素学研究センターの各関連施設とも連携して、統合医療教育および生命科学研究的重要な拠点となる

使命を担っている。

臨床においても口腔外科／口腔内科の病棟である西病棟9階と医局の導線は飛躍的に短縮されたが、逆に外来が遠くなり新外来棟の1日も早い整備が待たれる。歯科麻酔科は、医科麻酔科とともに緊急対応を考慮していただき中央診療棟の手術部に最も近い3階に移転し、手術部部門システム（ORSYS）のネットワークも配備された。大学病院外来棟の新設が決定され、これから県立中央病院と一体となった総合メディカルゾーン構想によるハード・ソフト両面にわたった連携が大きく展開されていくことが期待される。

今回の移転に関しては、アスベストを含有した古い実験設備の問題やクレーン車を使用した引越し作業など、各分野とも大きな苦労があった。しかし口腔科学教育部の他分野を含めた関連各位のご協力により、無事に研究、教育、臨床を推進する上で十分な基盤が構築された。今後は、開設以来の長年にわたる医局の垢を落とした気持ちで、この移転を新たな出発点として徳島大学が国際的競争を勝ち抜いていくために、貢献できる存在感ある部門になれるよう目指していきたいと思う。



合同カンファレンス等を行っている共用スペースにあるカンファレンスルーム



各分野の実験室



各分野の実験室



実験用X線撮影室

薬学系臨床3分野の生命科学総合実験研究棟への移転

医薬品病態生化学分野 山崎 哲 男

医薬品機能生化学分野 土屋 浩一郎

医薬品情報学分野 山内 あい子

薬学部は、平成18年度から薬剤師育成のための6年制薬学教育がスタートし、これまでの創薬(=くすりを創る)中心の教育・研究に加え、薬を適正に使うための育薬や「患者に顔の見える薬剤師養成」が求められています。それに伴い、従来の“薬学部内だけで完結する教育・研究”だけでなく、医療の現場に根ざした教育・研究が必要であるとの認識から、平成17年度、ヘルスバイオサイエンス研究部内に「ヘルスバイオサイエンス研究部医療薬学教育検討ワーキンググループ委員会」を立ち上げて協議を重ねました。その話し合いの中で、医学部・歯学部の臨床系教室と同様に病院内に足場を置き、診療補助・研究・教育を行う事が薬剤師養成のみならず徳島大学の医療人育成に大いに寄与することとなると考え、薬学部所属の臨床薬学講座(3分野)(以下、臨床3分野)を新たに設置することが決まり、今回の移転のきっかけとなりました。その後、薬学部内で移転に関する協議を進め、薬学部18分野のうち医薬品病態生化学分野(旧:微生物学講座)、医薬品機能生化学(旧:生化学講座)および医薬品情報学分野を大学病院内に移すこととなり、平成22年11月末に改修後の生命科学総合実験研究棟(医学臨床B棟、旧第3病棟)5階への移転を完了しました。

以下、個々の研究室の概要について簡単に紹介します。

- ①医薬品病態生化学(山崎哲男教授、新垣尚捷准教授、柴田洋文助教)は、「オルガネラのシグナル特性」を切り口にして、免疫疾患の発症メカニズムを追究しています。免疫応答、なかでも紫外線に対する免疫応答を主たる対象として、その異常に起因する病態の解明と治療薬シーズの開発を目指しています。
- ②医薬品機能生化学(土屋浩一郎教授、吉村好之准教授、石澤啓介助教)は、アルツハイマー病等の神経変性疾患の

病態解明とともに、酸化ストレスをキーワードとした生体内レドックスを制御する分子の動態を解明して抗酸化医薬品の開発、および既存医薬品の再評価・および剤形の修飾による医薬品の新たな効能・効果に対する機序の解明を通じ、薬学と医学についての橋渡し研究、すなわち育薬に関する研究を進めていきます。

③医薬品情報学(山内あい子教授、佐藤陽一准教授)は、医薬品の適正使用や育薬を目的として、薬物や化学物質の安全性・有効性に関する情報を収集、解析、評価することにより、有益な情報を、新薬開発や薬物治療の現場に効果的に提供・提案することを目指しています。特に、医薬品に関連する症例情報を情報科学や疫学などの手法を用いて*in silico*で解析・予測する試みや、個別医療への応用を目標に肥満・糖尿病に関する基礎的研究などを行っています。

臨床3分野は、本年度から、6年制薬剤師教育における「病院実習モデルコアカリキュラム(2.5ヶ月間)」のうち1ヶ月間を担当し、病院薬剤部と協力して研究マインドを有する薬剤師の養成を開始しました。また研究分野では、ヘルスバイオサイエンス研究部に所属する医学部・歯学部の講座と連携して、共同研究にも積極的に取り組んでいます。

徳島大学薬学部は平成24年度に創立90周年を迎えますが、今回の移転は薬学部にとって大胆な試みであるとともに、総合医療教育のモデルケースとして全国の注目を集めています。今後薬学部臨床3分野は新たな気持ちで生命科学総合実験研究棟の一員として、微力ながら徳島大学の発展に貢献していきたいと考えておりますので、ヘルスバイオサイエンス研究部のご支援、ご協力を賜りますよう、よろしく願いいたします。

春を迎え、総合研究支援センターの活動について最近のトピックスをお知らせしたいと思います。

1) 新たなマイクロアレイ解析の開始：疾患ゲノム研究センター（高濱センター長）のご協力を得て、ゲノム研に導入されましたAgilent社のマイクロアレイを用いた受託解析を新たに開始しました。先端医研にありますAffymetrix社のマイクロアレイの受託解析はこの2年半で211サンプルの依頼があり、大変好評でしたが、今回特徴の異なるAgilent社のアレイも選択していただけるようになりました。始めて1ヶ月足らずですが、すでに28サンプルの依頼をいただいております。皆様もこの機会に是非ご利用ください。なお、アレイについてのご相談やご質問、受託の依頼については、センターの堀川までお問い合わせください。

2) 蛋白質同定サービス：LC-MS/MS受託解析もゲノム研のご支援を得て開始してからもうすぐ4年になります。これまでに547サンプルの分析依頼があり、同定率98.4%を誇っております。最近では、評判を聞きつけて学外からの解析依頼も増えており、これまでに6大学1病院1企業から依頼を受けております。蛋白質同定をされた方、興味のある方は、是非センターの佐川までご連絡ください。

3) 研究支援ネットワークシステム：蔵本地区の機器の検索や予約ができる研究支援ネットワークシステムが本格的に稼動して1年になります。現在までに267グループに登録いただき、活用いただいております。機器の予約だけでなく、教室の使用料の確認等の予算管理が行えて大変高評価をいただいておりますが、将来的には機器の使用法、必要消耗品のカタログ番号、実験プロトコル等を記載し、設置機器を使用した研究にさらにお役に立てる形にしていきたいと考えております。実験計画を組まれる時には、是非、本システムで機器検索をしてください。やりたい実験に適した機器が必ず見つかると思います。なお、本システムについて何かご希望がありましたら、センターの三澤、吉田、北池までご連絡ください。

4) 液体窒素自動管理システム：胸部・内分泌・腫瘍外科分野の丹黒教授を中心に、基礎医学研究棟1階の液体窒素自動管理システムを利用した組織バンクが稼動しつつあります。21世紀COEからの懸案事項でしたが、ようやく本格的な開始となります。この液体窒素自動管理システムは、講習会を受講いただけましたら液体窒素のくみ出しにも使用できます。これまでに30教室近くに登録いただき、年間500回以上のくみ出しに利用していただ

いております。また、本システムは自動管理のため液体窒素が枯れることはありませんので、大事な細胞の保存にも大変適しており、多くの教室に細胞株の緊急時のストック場所として利用していただいております。ご利用のご希望がありましたら、センターの岡村までご連絡ください。

5) バイオイメージング研究部門：総合研究支援センター内に新たにバイオイメージング研究部門が設置され、バイオイメージングステーションの運営を担当することとなりました。これに伴い、先端医療研究支援部門も先端医療研究部門と改名され、さらに高度な研究支援を行える体制を整えるように求められています（略称は先端医研のままです）。バイオイメージング研究部門については、現在事務レベルで交渉中である神戸理研の分子イメージングセンター（渡辺センター長）との連携大学院の基盤施設として、イメージング研究の支援をできる組織になっていくと思います。さらに、ニコニインステックとの包括協定も締結される予定で、締結後は臨床研究B棟1階の顕微鏡群を設置した領域は、「ニコニ光イメージングプラットフォーム（案）」として運営され、今世界的に注目されている超解像度顕微鏡や超高速共焦点レーザー顕微鏡も新たに導入される予定になっております。これで現在のイメージング研究が追求する「より速く」「より深く」「より広く」「より詳細に」のそれぞれの条件を満たした顕微鏡がすべて徳島大学に設置されることになります。是非、皆様の研究にご活用ください。

最後になりましたが、医学部総研を変革して先端医研を立ち上げられた曾根先生、その後総合研究支援センターとして発展させていただいた林先生がこの春にそろって退職されました。この場をお借りして深謝致したいと思います。



林 良夫先生

曾根三郎先生

第7回HBS公開シンポジウム開催報告

メインテーマ「現代医療における高度実践看護師の役割」



高度実践看護師に求められる能力とは何か、何をなすべきか議論するために平成22年11月15日(月)13:30から長井記念ホールにおいてHBS研究部シンポジウムを開催した。学生を初め、教員や病院職員等275名の参加を得て活発な議論がなされた。基調講演では、日本看護協会会長の久常節子氏をお招きし、「安全性を念頭に置いた看護の機能拡大と労働環境」の題で、看護師が働き続けられる条件の整備などについてご講演頂いた。HBS研究部教授の雄西智恵美氏から「がん専門看護師を育成して—さらなる専門性を求めて」をテーマに、看護に興味をもちキャリアを研鑽していくことについての発言があった。

看護部長の木田菊恵氏からは、「専門性を高めるための臨床現場の教育と取り組み」として、本院で計画実施されている卒後教育、看護研修等についてのあり方が説明され、個別性の重要性を強調された。保健学科長の二宮恒夫氏より、「看護の質向上のために求められるもの」として、看護は患者さんを中心に考えることが重要であると臨床医としてのご体験から話された。和田眞副学長より、「患者家族

女性の健康支援看護学分野 岸田 佐智

の立場からの看護への期待—最先端医療から看取りまでを経験して」とご子息を亡くされた経験から、看護者に対して哲学や死生観を持つことの必要性を訴えられた。以上のシンポジストからご発言を頂き、その後指定発言として苛原病院長より医師から期待する高度実践看護師の役割についてご意見を頂いた。最後の質問で看護の専門性を高めるための必要な能力について6名の方のキーワード、枠を超える(久常氏)、キャリアコミットメント(雄西氏)、キャリア形成(木田氏)、自分にはこれができるというものを持つ(二宮氏)、心底から生と死を考える(和田氏)、自立した看護師(苛原氏)が提示され、盛会のうちに終了した。



HBS市民公開講座開催報告

衛生薬学分野 徳村 彰

平成22年度のHBS研究部の市民公開講座は薬科学教育部が担当し、平成22年10月23日(土)午後2時から4時過ぎまで徳島大学長井記念ホールで開催しました。薬は私たちの健康維持に欠かせないものですが、最近では切れの良い薬が登場し、時には間違った使用方法により問題が生じる事もあります。薬を正しく使い、市民の皆様健康な生活を過ごして頂きたいという願いをこめて本市民公開講座を企画し、「くすりを正しく使って健康な生活を」のテーマを掲げました。

当日は、約100名の聴衆の前で、薬科学教育部の高石喜久部長の挨拶と開催趣旨の説明(写真)に続き、4名の演者による講演が行われました。最初は、「ヒトにより異なる薬の効き方の謎」と題して、HBS研究部薬学系の滝口祥令先生が、薬の効能の基盤となる薬理学的な概念をわかりやすく解説しました。次に、薬学部の中西智子先生が消化器系の薬を例にとり、「うまく使おう!薬剤師とお薬手帳」の題目で自身の実践的な活動経験を交えた講演を行いました。続いて「徳島大学病院『お薬相談室』の活動より・“くすりとの付き合い方”」と題してHBS研究部薬学系の土屋浩一郎先生が、徳島大学病院で開設されている「お薬相談室」の活動報告を含む実践的な内容を紹介しました。最後

に「漢方薬民間薬と上手に付き合うコツ」の題目で、大学病院薬剤部の川添和義先生が、民間薬と漢方薬との違いをわかりやすく解説の上、それぞれの目的に合った使い方の必要性を強調しました。4講演の内容は随所で繋がっており、全体を通して私たちが伝えたいことが表現できたのではないかと感じております。

できるだけ多くの市民の皆様へ、薬の正しい使い方の情報をお知らせしたいという公開講座実行委員会の考えと、徳島大学病院の広報活動の一環として本市民公開講座の公開を加えたいとの希望を合わせて、本市民公開講座の全容を、ケーブルテレビ徳島から数度にわたり放送しました。好評を得たことを追記します。



ソウル大学 — 徳島大学学術交流協定20周年記念シンポジウム報告

機能分子合成薬学分野 教授 大 高 章

12月22日から12月24日にかけて、国立ソウル大学薬学大学校と徳島大学薬学部間の学術交流協定締結20周年を記念するシンポジウムが淡路夢舞台国際会議場で開催されました。ソウル大学側から50名（教員23名、学生27名）、徳島大学側からは香川学長、五十嵐副学長、福井国際センター長をはじめとする93名、そして来賓、外部講師の先生5名を加えた参加者総数148名の会となりました。本学術交流協定は平成2年に締結されたものであり、教員による相互訪問と学術講演を基本として、両校の友好関係を深めて参りました。その間、10周年記念シンポジウムがソウル大学のお世話により韓国済州島で開催されています。今回は、高石薬学部長を実行委員長とし、その下に教員5名（伊藤教授、篠原教授、石田准教授、柏田准教授、大高）からなる実行委員会を組織し、シンポジウムの企画、運営を行って参りました。まずは、徳島大学薬学部に関係する多くの皆様方のご協力により、無事シンポジウムを終えることが出来たこと、ご報告申し上げます。

本シンポジウム開催が具体化して参りましたのは、昨年末のことと記憶しています。平成21年3月に石田准教授とともに大高がソウル大学を訪問させて頂いたことを縁とし、私、大高が中心となり、高石学部長の指揮下、20周年記念シンポジウムを企画させて頂く運びとなりました。素案をまとめ、平成22年6月学術交流協定更新時に伊藤教授、柏田准教授、川瀬課長補佐とともに再度ソウル大学を訪問し、具体案の確定作業に入りました。この際、ソウル大学から大学院生による口頭発表の機会を是非設けてほしいとのご要望を頂きました。現在、ソウル大学薬学大学校では、国際舞台で通用するプレゼンテーション能力を持つ学生の育成を目指し、英語によるプレゼンテーション教育に力を入れているようです。これは、ソウル大学が京都大学、大阪大学と共催で大学院生発表会を企画していることから伺い知ることが出来ます。そこで、シンポジウムは、両校学部長による基調講演、教員による口頭発表、大学院生による口頭発表、ポスター発表、さらに薬学教育6年制に関するミニシンポジウムから構成することと致しまし

た。薬学教育に関するミニシンポジウムは、韓国薬学教育が今年9月より6年制に移行することを踏まえ、教育問題に関する意見交換を主目的とし、土屋教授に企画して頂きました。最も、危惧したのはやはり大学院生による口頭発表会でした。徳島大学薬学部では大学院生による英語発表会の企画は今回が初めてです。しかし、心配は杞憂に終わりました。学生諸君そして指導教員の努力が実り、ソウル大学生に負けぬプレゼンテーションが出来たのではないかと考えています。ソウル大学との学術交流を基盤とした大学院生英語発表会、これも薬学部における英語教育の一環として検討の価値あるものではないかと思えます。

学術事業以外に、初日には20周年記念パーティー、2日目にはFarewellパーティーを企画致しました。記念パーティーは、本交流事業の意義をご理解頂き、長年にわたり絶え間なくご援助を頂きました株式会社大塚製薬工場への感謝状贈呈をもって開始致しました。酒杯を交えることで、両校の交流がよりスムーズに進んだものと確信致しております。また、最終日にはソウル大学からの参加者を対象に、奈良観光を実施致しました。唐招提寺、薬師寺、東大寺を巡る小旅行です。京都を訪れた方は多いですが、ほとんどの方は初めての奈良で、シルクロードから朝鮮半島を経た文化の終着点、それがここ奈良であるということに、自国文化との比較で、大変興味を示して下さいました。最後に皆さんを関西国際空港にお送りし、20周年記念シンポジウムを無事終了することが出来ました。

今まで、本交流事業は教員間の交流が中心となっていました。今回、大学院生口頭発表会を設けることで学生間交流の礎を築くことができたと思っております。親密な学生間交流構築を一つの方向性とした教育プログラムの策定も今後必要ではないでしょうか。最後になりますが、今回の記念シンポジウムを成功裏に終えることが出来たのは、大学本部からのご援助、また事務方も含めた薬学部所属する皆様の多大なご協力のお蔭であることを申し添えたいと存じます。



徳島大学AWA (OUR) サポートシステム

徳島大学AWAサポートセンター長 本 仲 純 子

平成22年度文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業に、徳島大学の取組「徳島大学AWA (OUR) サポートシステム」が採択されました。

AWAサポートセンターは平成22年10月にその活動の実施母体として、男女共同参画推進本部の下に開設されました。センター長、コーディネーター、技術補佐員が常駐し、「啓発・広報」、「人材育成」、「ワークライフバランス支援」の3部門14名の兼任教員、2名のアドバイザー教員等と、徳島大学の男女共同参画の推進、女性研究者支援に意欲的に取り組んでいます。

徳島大学の女性教員の割合は16.5%であり、全国平均19.5%よりも下回っています(平成21年4月)。また、助教層は28.9%に対し教授は6.8%にすぎません。研究者として最も充実した時期であるべき30~44歳の女性研究者が急激に減少する傾向にあり、子供のいる比率も著しく減少します。この事は、スキルアップやキャリアアップ時期と出産・育児の時期が重なり、離職せざるを得ない状況に追い込まれる事を示唆しています。

「徳島大学AWA (OUR) サポートシステム」は、30歳代の女性研究者が、離職することなく研究を継続することができる施策を立案、実施していく計画です。具体的には3つの目標を掲げています。①女性研究者数を研究者全体の20%以上に引き上げます。②論文発表数、学会発表数を10%以上増加させます。③30歳代を中心とした女性研究者のワークライフバランスを実現します。同時に次世代を見据えての男女共同参画への意識啓発の推進も行って参ります。

平成22年12月7日にはこの事業のキックオフシンポジウム「AWA (OUR) STYLEの研究者支援確立をめざして」を開催しました。県内外から会場に入りきれないほど多くの方にご参加いただきました。お忙しい中ありがとうございます。



香川学長による「徳島大学男女共同参画宣言」

いました。

高井美穂衆議院議員、塩見美喜子慶應大准教授の講演では、ともにご自身の経験から子育てする女性研究者を勇気づけていただきました。

また香川征学長により「徳島大学男女共同参画宣言」が発表されました。

立ち上がったばかりの事業ですが、このキックオフシンポジウムを皮切りに様々な取組に着手しています。

まず、平成23年1月には学長裁量ポストによる女性研究者プロジェクトで、女性講師1名が誕生しました。

同年1月26、27日には全米第1位と言われるテキサス大学MDアンダーソンがんセンターの小牧律子教授を招聘し、キャリアデザインセミナーを開催しました。

また、女性研究者による中・高校生向け出張講義によるロールモデルの提示、研修旅行(リトリート)による女性研究者の異分野間研究交流、女性研究者ネットワークの構築、人材バンクの設立・運営、およびメンター制度、子育て世代の女性研究者支援のための研究支援員の配置、ベビーシッター制度、育児支援情報紹介などに取り組んでいく予定です。



林研究部長、小牧教授、本仲

徳島大学における男女共同参画が十分に推進され、男女共にその能力が持続的に発揮できる環境整備ができますように、皆様方の多大なるご支援ご協力を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。



部門会議の様子



ユニバーシティミュージアムの一翼としての解剖標本室の設置

口腔顎顔面形態学分野 教授 北村 清一郎

徳島大学にユニバーシティミュージアムができればと
考え、医学部解剖教育支援室の協力も受け、人体解剖標本
や人体解剖模型などの作製・収集・購入に努めてきました。
現在までにホルマリン標本203点、シリコン含浸標本72点、
乾燥標本など27点、解剖模型(写真1)104点、上記以外
に、動物の頭骨標本(写真2)など124点が揃いました。こ
れらの多くは歯学部解剖実習室にあり、歯学生のみなら
ず、学内外の医療系教育機関の解剖見学実習(写真3)や
様々な医療職種の卒後講習会などに供され、年1回の2日
間は「人体解剖標本の展示」として医療従事者や医療系学
生にも公開され(写真4)、「地域の解剖教育センター」と
して社会貢献活動の一端を担っています。また、歴代歯学
部長の配慮もあり、解剖実習室近くに常設展示室『人体解
剖と骨のミュージアム』が準備され、一般公開可能な解剖
模型や動物頭骨標本などが集められました。



写真1 解剖模型



写真2 動物の頭骨標本



写真3 医療系教育機関への解剖見学実習



写真4 人体解剖標本の展示

解剖学は医学・歯学教育の根幹をなし、医療系教育機関
でこれを教授しないところはありません。これらの標本・
模型は、医学生・歯学生のみならず、解剖実習の機会に恵
まれないコメディカル学生の解剖教育に非常に役立ちま
す。医療教育開発センターで行われている様々なシミュ
レーション教育とうまく組み合わせることで、その教育
効果を高めることもできます。常設展示室を公開するこ
とで、徳島大学の広報活動にもつながります。常設展示
室には壁面にパネルを設置し、解剖学的知識のみならず、
献体活動のコーナーも設け、学生の“心”の教育に役
立たせたいと考えます。

通常でも教育負担の大きい解剖学教室にとって上記活
動の負担は大きく、医療系教育機関の解剖見学実習など
に関しては、徹底したマニュアル作成と見学校教員の活
用、学部学生や科目等履修生の教育の一環に取り込む
など、様々な工夫を凝らしていますが、限界があります。
今後更なる活用を図るべく、運営などについて全学的
に取り組む必要を実感しています。

個人型研究 さきがけ：

iPS細胞と生命機能領域「実験人類遺伝学の確立」(大挑戦型)

理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター幹細胞研究グループ 武藤 太郎

平成22年12月まで歯学系分子医化学分野でお世話になりました武藤です。歯学部では歯のエナメル形成に異常をきたす変異体ラットや、トランスジェニックラットの遺伝学的解析に長らく携わっておりました。モデル動物の遺伝学というのは結果がクリアになる半面、特に哺乳類では世代期間が長い結果を得るのに時間がかかること、飼育にかかる人的負担がネックとなっております。ラットを使った交配実験は、実験補助員のヘルプの無い環境では体力的に厳しく、最近では研究者生命の危険すら感じておりました。どうにか哺乳類遺伝学をもっと簡単に、できれば

培養系で模倣できないか、さらには、ヒトの遺伝学にも適用できるレベルになればいいのに、という事をかなり本気で考える必要に駆られたのは、結果的に良かったのかもしれませんが。しばらく悩んでいたところに、iPS細胞を用いてその目的を満たす方法を思いつき、さきがけ研究に採択された次第です。現在はその方法の実現可能性を実証するために活動中で、実現した際には詳細な内容をお知らせできる事と思います。

旬というと、10日ほどの短い期間を連想してしましますが、なんとか息の長い展開にしていければと考えております。

第3回若手研究発表会開催報告

平成23年2月4日(金)、医学部第一会議室において、大学院ヘルスバイオサイエンス研究部主催の第3回若手研究発表会が開催されました。蔵本キャンパスの若手研究者が、専門分野の枠を越えて一堂に会し、日頃の研究成果を発表しました。今回は、9月に開催された「2010 Tokushima Bioscience Retreat」においてベストプレゼンテーションアワードを獲得された3名の大学院生にもご発表頂き、時間を超過して活発な質疑応答がなされました。発表会終了後、生協「くらら」において懇親会が催され、HBS若手研究ベストプレゼンテーション賞の発表がありました。栄えある賞には、ストレス制御医学分野の増田清士助教が選ばれました。

発表者は以下のとおりです。

医科学

増田 清士 (ストレス制御医学・助教)

「細胞内ストレスシグナルと転写後調節」

黒川 憲 (ストレス制御医学・博士課程2年)

「選択的スプライシング調節因子SRSF3による細胞周期とアポトーシスの制御機構」

倉本 卓哉 (腫瘍内科学・博士課程2年)

「細胞肺がん転移におけるDLL4-Notchシグナルの臓器特異性に関する検討」



口腔科学

大浦 律子 (口腔顎顔面矯正学・博士課程4年)

「マクロファージによるFas依存性アポトーシスを介した末梢トレランスの維持機構」

薬科学

辻 大輔 (創薬生命工学・助教)

「リソソーム病の病態解析と治療法確立」

栄養生命科学

河合 慶親 (食品機能学・助教)

「抗動脈硬化作用を有する食品ポリフェノール類の標的的部位と作用機構」

香西 美奈 (臨床栄養学・博士後期課程1年)

「甲状腺ホルモン受容体 $\beta 1$ を介したビタミンD合成酵素(CYP27B1)遺伝子の転写抑制機構」

保健科学

富永 辰也 (微生物・遺伝子解析学・助教)

「腎発生に必須なBMP4が関与する糖尿病性腎症発症の分子機構」



国際口腔科学シンポジウム開催報告

分子医化学分野 野間隆文

全国7国立大学歯学部（新潟・岡山・広島・徳島・九州・長崎・鹿児島）の協力連携事業である「口腔からQOL向上を目指す連携研究」の一環として平成22年12月17-18日の両日、インドネシアのバリ島において徳島大学、新潟大学、インドネシア共和国ガジャマダ大学の3大学共同主催による国際口腔科学シンポジウムが開催された。徳島大学歯学部からは20名が参加した(写真参照)。日本、インドネシア以外にも、オランダ、香港、中国、韓国、マレーシアからの参加者も加わり、総勢約200名が一堂に会した。研究・学術発表ではSpecial Lectureが3題、Keynote Presentation 3題、Oral Presentation 9題、Poster Presentation 59題で、いずれの発表においても、大学院生を含む若手研究者を中心として、熱い議論が繰り広げられた。その他の活動として、3大学歯学部長による大学紹介、河野、伊賀両教授による「KJ法を用いた歯学教育法の実技指導」といった教育関連のセッションにおいても参加者の熱心な討論が交わされ、アジア諸国における実力のある歯科医

師・研究者育成の熱意に触れることができた。また、オフ時間を生かした懇親会では、Poster Presentationにおける優秀賞が田中栄二選考委員長より発表され、徳島大学口腔科学教育部から歯科補綴学のMeinar Nur Ashirin氏と歯科矯正学の石本恭子氏の両氏が選出され、盛大な拍手とともに栄誉を受けた。



「国際交流の夕べ」を開催して

医学部長補佐 村澤普恵

今回で7回を数えた「国際交流の夕べ」、平成22年12月21日(火)に、蔵本キャンパスの留学生、教職員合わせて約80名が参加して開催されました。留学生は、医歯薬、疾患酵素学研究センター、疾患ゲノム研究センターから9か国の学生とご家族が参加しました。

第一部の「お国紹介」では、ベトナム、インドネシア、モンゴル、中国の留学生が、それぞれのお国の食、音楽、観光等を通して母国を紹介してくださいました。留学生の皆さんは、研究で忙しい毎日を送っているのですが、この日のためにたくさんのスライドを準備し、一生懸命発表してくださいました。第二部は、場所を医学部のクララに移しての交流会です。交流会では、国際交流に関心のある日本人学生も加わり、英語と日本語を交えてあちらこちらで交流の輪が広がりました。

この「国際交流の夕べ」は、母国を遠く離れて、「徳島」という「外国」で暮らす蔵本キャンパスの留学生の皆さんに、徳島で楽しい思い出を作ってください、また他の国の留学生の皆さんとも大いに交流していただきたいとの思いで毎年開催していますが、もっと日本人学生にも参加していただき、徳島のこと、日本のことを留学生の皆さんに伝えていただく場であっても良いのではないかと思います。

蔵本にいながらにして色々な国の皆さんと交流ができる絶好の機会ですし、留学生の皆さんにとっても、日本人学生と知り合い、徳島や日本の文化を知る良い機会になるのではないかと思います。

「国際交流の夕べ」は毎年年末に行っています。12月の声を聞く頃になりますと、学内掲示板やホームページで開催のお知らせをします。お国紹介や交流会にぜひお気軽に参加してください。

末筆となりましたが、「国際交流の夕べ」開催にご協力いただきました皆様に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。



新任教授ご挨拶

医療教育学講座



医療教育学分野 赤池 雅史
平成22年12月1日付で、新設された医療教育学分野の教授を拝命いたしました。私は昭和60年に徳島大学を卒業後、徳島大学第一内科、国立循環器病センターでの臨床研修、米国ロチェスター大学への研究留学を経て、循環器

内科学に在籍し、内科学、特に循環器領域の診療と研究を行ってまいりました。また、平成21年からは医療教育開発センター長を併任しております。今後もこれまでの経験を活かしながら、領域横断型教育クラスターをはじめとする大学院教育支援、職種間連携教育ならびにスキルス・ラボを活用したシミュレーション教育等を推進し、世界に通じる生命科学研究者と高度医療人の育成支援、ならびにその教育手法の開発研究に取り組む所存です。皆様方にはこれからもご指導とご鞭撻を賜りますよう、どうかよろしくご願ひ申し上げます。

寄附講座



心臓血管病態医学分野 島袋 充生
皆様、はじめまして、島袋 充生(しまぶくろ みちお)と申します。昭和62年、琉球大学医学部医学科(1期生)を卒業し、循環器内科、糖尿病・代謝内科の臨床に関わってきました。脂肪酸由来分子がさまざまな細胞機能異常

をおこすことを脂肪毒性ととらえ、内臓肥満症、耐糖能異常が心臓血管病をおこすメカニズムを明らかにしたいと夢見ています。平成23年3月より、心臓血管病態医学分野 Department of Cardio-Diabetes Medicineという講座に赴任させていただきます。徳島大学は、ハードウェア、ソフトウェアとも大変充実し、素晴らしい指導者・同僚に恵まれています。皆様のご指導、ご教示を賜りながら、Cardio-Diabetes Medicineというあたらしい分野で、発信していきたいと思ひます。

生体防御腫瘍医学講座



放射線科学分野 原田 雅史
H23年4月1日より徳島大学放射線科学分野教授に就任いたしました。最近の放射線機器の高速化、高精度化をうけて徳島大学病院における放射線科業務も急増しており、一方入局者数の低迷が続いているために、放射線科及

び放射線部職員の負担が限界にきているのが現状と思われれます。これを解決し、各診療科からのご要望にできるだけお応えするために、業務の効率化と集中化を行いながら、入局者数の増加を図るために医局の魅力を向上させていきたいと考えています。放射線部ではご要望が多いMRI検査数の増加に貢献するため、早朝検査枠の拡大にむけて環境を整えているところです。

一方研究についても放射線科は他科との共同研究や工学や薬学といった他分野との協力が多く、放射線科が中心となって進めている研究の取り組みも含めて、さらに発展で

きるように努力したいと考えています。特にH23年3月から本格的に稼働が始まったバイオイメージングステーションにおける動物のインビボ画像施設に関しても全面的に協力する予定となっています。既に臨床・研究両面で活動を始めており、皆様とのご縁が深い部門であると思ひますので、気軽にご意見、ご相談いただければと存じます。今後ともどうぞよろしくご願ひ申し上げます。

器官病態修復医学講座



人体病理学分野 坂下 直実
平成23年4月1日付けで佐野壽昭教授の後任として徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部人体病理学分野に赴任致しました坂下直実と申します。私は平成元年に熊本大学を卒業後

内科医としての臨床研修を受け、大学院進学後は病理学術として研究に専念してきました。専門はコレステロールによる細胞機能制御で、特にエンドゾーム・ライソゾーム機能異常を介したマクロファージの病態制御機構を中心に研究を展開しております。徳島大学は伝統ある基礎・臨床医学講座に加えて、疾患酵素学研究センター、疾患ゲノム研究センターという国内有数の研究組織を有しており、医学研究者にとって大変恵まれた環境だと思ひます。大学人の本務である医学研究と良き医療人、優れた研究者の教育育成のみならず、病理解剖、病理診断を通じて徳島の地域医療にも貢献したいと望んでおります。専門である病理学を通じて徳島大学の発展に貢献できれば幸いです。皆さま方のお力添えを宜しくご願ひ申し上げます。

看護学講座



学校保健学分野 梶原 京子
平成23年4月1日に、徳島大学医学部保健学科看護学専攻へ赴任してきました梶原と申します。研究分野は学校保健学で、子どもの健康問題と養護教諭の役割及びアイデンティティに関する研究をしています。私は、小学校や

高等学校等で養護教諭を経験した後、大学で養護教諭養成教育に携わってきました。本学の保健学科看護学専攻では、養護教諭の一種免許状、保健科学教育部前期博士課程では専修免許状を、所定の単位を取得することにより取得できます。児童生徒の心身の健康課題に対して中核的な役割を果たしている養護教諭への期待が高まっているなか、子どもたちの健康づくりを支援できる資質の高い養護教諭の養成を目指して研究・教育を行っていききたいと考えております。よろしくご願ひいたします。

医用情報科学講座



画像情報医学分野 大塚 秀樹
平成23年4月1日付けで画像情報医学分野に着任しました大塚秀樹と申します。平成6年に徳島大学医学部医学科を卒業し、大学病院で研修の後、大学院で学位を取得し、3年間愛媛県立中央病院で勤務しました。その後アイオ

ワ大学放射線科核医学部門(Prof. Graham)に留学し、帰国後はHBS研究部放射線科学分野で核医学診療・研究・教育を行っていました。研究・臨床・教育は互いに支え合い、連携・連動し一体となってこそ充実した成果があげられると考えています。研究・臨床では腫瘍画像診断・循環器画像診断に興味を持っています。今後さらに大学院の充実をめざし、国際的・先進的な研究を核医学・磁気共鳴学分野を軸として、医学だけでなく他分野とcommunicationを大切に、collaboration, cooperationしていきたいと考えています。HBS研究部は多分野の専門家よりなる非常に“懐の深い”チームであると思います。まだまだ若輩ですが核医学・磁気共鳴学分野発展に尽力したいと考えておりますので、今後ともご指導お願い致します。

口腔保健学講座



地域医療福祉学分野 白山 靖彦
平成23年4月1日付けで、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部地域医療福祉学分野を担当させて頂くことになりました。前任校では、障害福祉領域を中心に社会福祉士養成に携わっておりました。研究におきましては、高次脳機能障害者に対する支援システムに長らく関与し、有効とされる医療・福祉連携モデルの実証研究を図

て参りました。今後は、さらに医療・福祉連携の形を進展させ、福祉領域における歯科口腔保健の重要性などにも着目していきたいと考えています。研究部におきます人文社会科学系教員としての希少性を果たすためにも、いっそうのご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

口腔保健科学講座



口腔機能福祉学分野 松山 美和
平成23年4月1日付けで、口腔機能福祉学分野を担当させていただくことになりました。私は平成元年に九州大学歯学部を卒業し、同大学院に進学、大学院修了後は九州大学で助手、講師として歯学研究、教育および歯科臨床に携わってきました。私の現在の主な研究テーマは「fMRIによる摂食機能時の高次脳活動」、「栄養学的見地による補綴治療効果の次世代型評価法の確立」、「高齢者の口腔ケアの臨床効果」などです。新たな研究の場となる徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部は医・歯・薬学、栄養学、保健学領域を結集した統合大学院なので、今後は、他の専門領域にも人脈を広げて連携をとり、学際研究に取り組んでいきたいと思っています。新参者ではありますが、何卒ご支援、ご指導ご鞭撻いただきますようよろしくお願い致します。

退職教授一覧

●医学系

曾根 三郎教授(呼吸器・膠原病内科学分野)
H23.3.31 転出 国立病院機構高知病院院長
郷木 義子教授(学校保健学分野)
H23.3.31 退職

●歯学系

中野 雅徳教授(口腔機能福祉学分野)
H23.3.31 定年退職
林 良夫教授(口腔分子病態学分野)
H23.3.31 定年退職
吉田 秀夫教授(口腔保健基礎学分野)
H23.3.31 定年退職

訃報 H22.11.1 逝去 荒木 勉 薬学系 神経病態解析学分野 教授

学会情報

●第20回脳神経外科手術と機器学会 会長：永廣信治
日 時：平成23年4月8日(金)～9日(土)
会 場：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)
問合先：脳神経外科学分野
TEL：088-633-7149 FAX：088-632-9464
HP：http://cntt2011.umin.ne.jp/

●第4回日本整容脳神経外科研究会 会長：永廣信治
日 時：平成23年4月9日(土)
会 場：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)
問合先：脳神経外科学分野
TEL：088-633-7149 FAX：088-632-9464
HP：http://jsan2011.umin.ne.jp/

●第84回日本内分泌学会学術総会 会長：松本俊夫
日 時：平成23年4月21日(木)～23日(土)
会 場：神戸国際会議場・神戸国際展示場
問合先：生体情報内科学分野(栗飯原賢一)
TEL：088-633-7120 FAX：088-633-7121
Email：84jes@convention.co.jp

●日本循環器学会第98回中国・四国合同地方会
会長：佐田政隆
日 時：平成23年5月13日(金)～14日(土)
会 場：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)
問合先：循環器内科学分野(山田博胤、合田浩子)
TEL：088-633-7859 FAX：088-633-7894

●International Symposium on Micro/Nano Aspects of Biomaterials 会長：Kenzo Asaoka
日 時：平成23年7月19日(火)
会 場：Kyoto-TERRSA
問合先：生体材料工学分野
TEL：088-633-7333 FAX：088-633-9125

●第41回日本腎臓学会西部学術大会 会長：土井俊夫
日 時：平成23年9月30日(金)～10月1日(土)
会 場：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)
問合先：腎臓内科学分野
TEL：088-633-7184 FAX：088-633-9245

第28回日本骨代謝学会 優秀演題賞

近藤 剛史 生体情報内科学分野 大学院生



受賞年月日：2010年7月21日
受賞内容：
DNA脱メチル化因子、MBD 4は
ビタミンD代謝に必須の因子である

第28回日本骨代謝学会 高得点演題賞

山本 浩範 臨床栄養学分野 助教



受賞年月日：2010年7月22日
受賞内容：
Klotho-FGF23シグナル異常による
スタニオカルシン2の発現亢進と
血管平滑筋細胞のリン酸誘導性石
灰化の抑制

The 9th International Conference of The Asian Clinical Oncology Society (ACOS9), Young Investigator's Award

齋藤 裕 消化器移植外科学分野 大学院生



受賞年月日：2010年8月27日
受賞内容：
The correlation between cancer
stem like cells and epigenetic
alteration in intrahepatic
cholangiocarcinoma.

第32回日本臨床栄養学会総会・第31回日本臨床 栄養協会総会・第8回大連合大会 優秀論文賞

●奥村 仙示 臨床栄養学分野 助教



受賞年月日：2010年8月29日
受賞内容：
間接熱量計を用いずに肝疾患患者
のLES適応を評価する血液生化学
指標の検討

10th International Conference Cancer-Induced Bone Disease (CIBD), Travel Grant Award

渡邊佳一郎 口腔顎顔面矯正学分野 大学院生



受賞年月日：2010年9月23日
受賞内容：
A novel anti-resorptive agent,
reveromycin A, ameliorates
bone destruction and tumor
growth in myeloma

第69回日本矯正歯科学会大会学術大会 優秀発表賞

川上 恵実 口腔顎顔面矯正学分野 大学院生



受賞年月日：2010年9月28日
受賞内容：
特殊加工コラーゲンを担体とした
マイオスタチンsiRNA投与による
骨格筋量調節法の研究

日本無機リン化学会 若手優秀研究発表賞

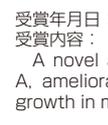
上村 剛史 創薬科学専攻薬品分析学分野 大学院生



受賞年月日：2010年10月7日
受賞内容：
振幅変調フロー分析法による微量
リン酸イオンの定量

American Society of Bone and Mineral Research (ASBMR) 2010 Annual Meeting, Young Investigator Award

渡邊佳一郎 口腔顎顔面矯正学分野 大学院生



受賞年月日：2010年10月17日
受賞内容：
A novel anti-resorptive agent, reveromycin
A, ameliorates bone destruction and tumor
growth in myeloma.

第63回日本細菌学会中国・四国支部総会 若手優秀発表賞

下畑 隆明 予防環境栄養学分野 大学院生



受賞年月日：2010年10月17日
受賞内容：
腸炎ピブリオエフェクタータンバ
ク質VP1680はIL-8の分泌を誘発す
る

平成22年度日本衛生学会 奨励賞

上村 浩一 予防医学分野 講師



受賞年月日：2010年10月30日
受賞内容：
日本人一般集団における残留性有
機汚染物質の蓄積状況やその関連因
子および健康影響

第38回構造活性相関シンポジウム SAR Presentation Award ノミネート賞

宗井 陽平 創薬科学専攻創薬理論化学分野 大学院生



受賞年月日：2010年10月31日
受賞内容：
分子科学計算に基づくベンゼンス
ルホンアミド誘導体の炭酸脱水酵素
阻害機構解析と相関解析に関する研
究

第38回構造活性相関シンポジウム SAR Presentation Award

比多岡清司 創薬科学専攻創薬理論化学分野 大学院生



受賞年月日：2010年10月31日
受賞内容：
インフルエンザノイラミニダー
ゼ-シアル酸誘導体複合体相互作用
の非経験的フラグメント分子軌道法
計算に基づく相関解析

日本薬学会中国四国支部 奨励賞

石澤 啓介 医薬品機能生化学分野 助教



受賞年月日：2010年11月6日
受賞内容：
腎：心血管障害における細胞内分
子機構解明とその治療法の開発

第58回国際歯科研究学会日本部会(JADR) 総会・学術大会 学術奨励賞

泰江 章博 口腔顎顔面矯正学分野 助教



受賞年月日：2010年11月20日
受賞内容：
Smad3 リン酸化阻害が創傷治癒
に及ぼす効果

第18回日本血管生物医学学会 Young Investigator's Awards 優秀賞

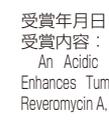
吉田守美子 生体情報内科学分野 大学院生



受賞年月日：2010年12月3日
受賞内容：
アンドロゲン受容体は虚血後骨格
筋細胞のアポトーシスと血管新生を
制御する

52nd American Society of Hematology (ASH) Annual Meeting and Exposition, Travel Award

渡邊佳一郎 口腔顎顔面矯正学分野 大学院生



受賞年月日：2010年12月6日
受賞内容：
An Acidic Milieu Created In Myeloma-Osteoclast Interaction
Enhances Tumor Growth, but Triggers Anti-Myeloma Activity of
Reveromycin A, a Novel Anti-Resorptive Agent

5th International Peptide Symposium Poster Award

小倉 圭司 創薬科学専攻機能分子合成薬学分野 大学院生



受賞年月日：2010年12月9日
受賞内容：
Synthesis of nonhydrolyzable
AMPylated amino acid analogues
for uncovering the physiological
role of AMPylation

第17回日本胎児心臓病学会学術集会 里見賞「研究部門」

加地 剛 産科婦人科学分野 講師



受賞年月日：2011年2月18日
受賞内容：
Dual dopplerを用いた肝静脈一
下行大動脈血流波形による胎児房室
伝導時間の検討

統合大学院として平成16年に発足したHBS研究部は、今年で8年目に入りました。本号では生命科学総合実験研究棟に関する特集を組みました。移転に関わった分野の労をねぎらうだけでなく、これからの益々の御発展を祈念いたします。今年もHBS研究部のハードウェアはまだ進化します。勿論、ハードウェアだけでなくソフトウェアも進化し続けています。本号の若手研究者や女性研究者の育成に関する取り組みの記事から、それが読み取れると思います。また、「世界的な研究・教育拠点の形成」に向けての外部発信も行われつつあります。玉置新研究部長ならびに林前研究部長の御言葉を真摯に受け止め、HBS研究部はこれからも進化し続けることでしょう。HBS研究部が進化していく姿を本号で伝え続けていければと思います。(尾崎 和美)

HBS研究部だより 第14号

発行日：平成23年4月1日

発行：徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

編集：研究部広報委員会

広報委員：酒井 徹(委員長)、泉 啓介、大高 章、尾崎和美、
田村綾子、細井和雄、森口博基、山内あい子、赤池雅史、
米原壽男

http://healthbio.basic.med.tokushima-u.ac.jp

問合せ：医学・歯学・薬学部第一総務係 大亀

isysoumu1k@jim.tokushima-u.ac.jp



The University of Tokushima Graduate School